（論文）

# 技術-情報社会における感性の喪失 (2)

## ―「安全」概念を問い直す―

# ‘Anästhetik’ in Techno-information Society: Reconsidering the concept of ‘Safety’

田島　樹里奈*
Jurina Tajima

**要旨**

本稿では、今日の急激な技術革新と IT 化に伴う情報過多の社会を「技術–情報社会」と捉え、社会の変容に伴い、「安全」概念がどのように変化しているかを現代思想の観点を援用しながら考察する。そのさい筆者は、「知覚」と「感性」の密接な関係に注目しながら、現代の技術–情報社会においては「感性の喪失」が常態化していることを指摘し、「安全」概念にはある種の暗黙の前提が潜んでいることを明らかにする。最終的に筆者は、「感性の喪失」が自己保存の働きと関わることを明らかにする。

**キーワード：**　知覚　感性　安全　アテンション　自己保存

## 1.　はじめに

数年前、筆者は、W・ヴェルシュ（Wolfgang Welsch）の「感性（Ästhetik）」に関する論考に着目しながら、現代の技術-情報社会においては「無感性（Anästhetik）」の状況がさらに進行していることを指摘し、それを「感性の喪失」として論じた[1]。本稿では、その延長線上の思索として、「知覚（Wahrnehmung/ perception）」に着目しながら、今日の技術-情報社会における「安全」概念を問い直していく。

本論に先立ち、あらかじめ上記の拙論で示した筆者の時代認識に触れておきたい。筆者は、現代の技術-情報社会における「感性の喪失」について論じる中で、その一因をハイパー資本主義[2]に見出した。ハイパー資本主義では、「商品」の非-物質化が進み、〈情報〉をはじめとする非物質的なものの

* 〒170-0011　東京都豊島区池袋本町2丁目5-15　東京交通短期大学運輸科准教授
jurina.tajima@toko.hosho.ac.jp

[1] 田島樹里奈［2019］。ここで筆者が「感性（Ästhetik）」と表記したのは、ヴォルフガング・ヴェルシュの「無感性（Anästhetik）」という概念から発想を得ているからである。つまり筆者は、カント的な意味における「感性（Sinnlichkeit）」のみならず、悟性も理性も含めた、人間的主体の能力も視野に入れている。ちなみにヴェルシュは、「無感性（Anästhetik）」を、「反=感性（Anti-Ästhetik）」、「非＝感性的なもの（Un-Ästhetisches）」、「感性的でないもの（Nicht-Ästhetisches）」などから区別している点にも注意したい。（Cf. W. Welsch,[1990], S.10.、邦訳、pp.3-4）。詳細については、拙論を参照されたい。

[2] 筆者が考えるハイパー資本主義とは、マルクスが批判した産業資本主義をも乗り越えていく、高度に発達した資本主義の新しい形態のことを意味する。

商品意義が大幅に増した。その一方で、技術-情報社会においては、徹底的な数字によるデータ管理が進み、人々のアテンション（注意・関心）をいかに引き寄せるかということが目下の課題となっている。そのため人々のアテンションが、実質的な通貨（the real currency）と呼べるほどまでに売上や利益に直結するようになり、更なるハイテク化と情報過多が促されたと考えられる[3]。こうしたアテンション・エコノミーの社会においては、外界の刺激に反応し受容する能力としてのいわゆる「感性（Sinnlichkeit）」が、直観するその瞬間からすでに管理され、ハイパー資本主義の支配下に置かれることになる。

筆者の見解では、以上のような社会で生きる私たちの多くは、日常的に情報の過剰摂取状態となり、刺激的な情報に注意（attention）を奪われながらもどこかでそれに対する懐疑的な視点を持ち、情報の良し悪しや真贋を的確に判断できぬままの状態にある。こうした状況は、後述するように、「信」と「知」が曖昧の状態とも言えるし、伝統的な知覚や意味概念すら意味を成さない程に混沌とした複雑な状況と言える。そして何より、情報過多の中で人々の感覚が鈍麻し、ヴェルシュが指摘した「無感覚的な麻痺状態（Anästhesie）によって感覚能力が閉め出されてしまう[4]」状態、すなわち「感性の喪失」が引き起こされていると考えられる。

本稿では、上記の認識に基づき、さらなる考察を以下の順序で進めていく。第一に、今日の技術-情報社会における「安全」概念の変容を考察し、「安全」概念のうちにはある種の暗黙の前提が潜在していることを明らかにする。第二に、ヴェルシュが警告を発した「無感性」の状態について、「知覚」の働きに注目しながら考察するために、まずは「知覚」と「感性」の不可分な関係を明らかにする。その上で、今日のメディア表象が与えた影響を考察する。第三に、急速な IT 化や飛躍的な情報の多様化と増大によって、技術-情報社会に生きる私たちは、「信」と「知」が曖昧になり、「知覚の補綴」に依存せざるを得ない状況にある。このような状況は、個々人の感性の喪失という主体的な問題だけではなく、社会全体にとって固有の課題を引き起こしていると考えられる。最終的に筆者は、「感性の喪失」が、「自己保存」との関係のうちに見出せることを明らかにする。

## 2　技術-情報社会における「安全」

### 2-1.　情報の可視化と予測

技術革新に伴い、劇的に変化した私たちの社会は、数十年前に比べてどうにも忙しい様相を呈している。IT 化によって私たちはかなりの時間を節約できるようになったはずであるが、実際の社会生活はセカセカと慌ただしく、むしろ人々の時間の余裕、そして心の余裕は少なくなっている。本来、〈未来〉とは、字義通りには「未だ来ず」を意味し、まだ未定で何が起こるかわからない状態を意味している。しかし私たちの日常生活において、時間は常に可視化され、〈将来〉を予測しながら、逆算の中で生きることを強いられている。言い換えれば、私たちの社会は、先行きの見えない〈未来〉よりも、予測可能で不確定要素を最小限に抑えた、“安全な”〈将来（＝将〔まさに〕来〔きた〕らん

---

[3] ダンベンポートとベックは、今日の経済活動においては「人間のアテンション」こそが希少であり、「ビジネスでも個人でも実質的な通貨」であると主張している。そしてこのような状況を「アテンション・エコノミー」と呼びながら、人々のアテンションを理解し管理することこそが、ビジネスを成功させる最も重要な決定要因であると指摘している。Thomas H. Davenport, John C. Beck［2002］, p.3.

[4] W. Welsch,[1990], S.11.（邦訳、p.4）。

とする)〉を迎えられるよう、つまりはできるだけ“安全な”生き方を選択するよう促されていると言っても過言ではない。

筆者は、こうした状況が顕在化した要因の一つとして、情報の可視化が関係していると考えている。というのも、今日の技術-情報社会においては、これまで可視化できなかったこと・予測できなかったことが、劇的なスピードで可視化され（visible[5]）・予測（pre-dict : 前もって-言う）できるようになっているからである。そしてそれらの情報をより平易な仕方で人々に共有する「見える化」は、社会全体で広がり、経済活動の中心的役割を果たすようになっている[6]。こうした現象は、日常的な生活レベルで考えれば便利で都合が良いが、他方で、私たちが生活する世界の知覚情報に根底的な変化を引き起こしているとも考えられる。そして筆者は、これらの状況が「安全」概念とも不可分の関係にあると考えている。そこで、まずは「安全」概念そのものに焦点を当て、この概念がどのように変容したかを検討したい。

### 2-2. 「安全」概念の変容

今日、「安全」という言葉は、社会生活のさまざまな場面で用いられている。個人や地域のレベルでは、交通安全や職業上のキャリアの安全があり、共同体や国家のレベルでは、経済上の安全から、国防に関する安全保障まで幅広くある。さらに、つとに叫ばれるSDGs（Sustainable Development Goals）もまた、地球の持続可能性を目標にした、広い意味での安全に関わる概念であると言えるだろう。語源的に見ると「安全（security）」という語は、ラテン語のsecuritas（安全、確実、無心）に由来する言葉であり、securus（心配のない、安心した、安全な）という語の派生語である。また、securusというラテン語は、se-（離れた）＋ cura（心配・世話・注意）からなる合成語ということは注意して良い。そしてcuraは、「治療・保存（cure）― 世話・心配（care）」の語源と繋がっているのである。

敢えて言及するまでもないが、「安全」とは、私たちが暮らす社会において必要不可欠なものであり、生命維持のためにも欠かすことのできない概念である。このように「安全」は日常生活のさまざまな場面で使われる言葉であり、それぞれの文脈によって微妙なニュアンスの違いがあるようにも見えるが、筆者にはある共通した暗黙の前提が存在するように思われる。以下では、それを顕在化するために、まずは（財）国際交通安全学会が公開している「『安全』を考察する[7]」という調査プロジェクトの報告書を参照したい。

この報告書の「まえがき」では、「我々は、久しく安全という用語をいわば暗黙知的なものとして、格段の疑問ももつことなく受け入れてきた」と述べながら、近年では「交通問題のみならず国際紛争のレベルも含めて、改めて安全が問い直されてきているが、多くの場合、事故抑止という結果が安全そのものであるといった考え方が通用し、安全というプロセスが軽視されている[8]」と注意を喚起して

---

[5] visibleが、目を使って見る(see)＋able ではなく、vision（想像や超自然の中で見たものや、神秘的・精神的な対象も含まれる概念）の派生語vis-ibleであることにも注意したい。

[6] その一方で、経済活動の根幹を成していた貨幣が、物質としての姿を持たないキャッシュレス化へと移行する現象は看過できない。この問題について、筆者はD・グレーバーの『負債論』が手がかりになると考えているが、本稿では紙幅の都合上論じることができないため、別稿にて論じたい。

[7] 小林實他［2004］、平成15年度研究調査報告書「『安全』を考察する」（プロジェクトNo.H504）、財団法人国際交通安全学会、2004年7月（https://www.iatss.or.jp/common/pdf/research/h504.pdf ：閲覧日2022.12.29）

[8] 小林實、同上。さらに小林は、「序論」の中でも、本プロジェクトの狙いと背景を述べながら、安全という概念

いる。さらに続く「序論[9]」では、近代化に伴い、人々の生活は「利便性、快適性を求めて飛躍的に進歩を遂げた」が、その反面、約10年のあいだに私たちを取り巻く地球環境や社会条件は激変し、サリン事件やアメリカ同時多発テロ（以下、9・11と略記）などのテロリズム、さらにはSARS、BSE、鶏インフルエンザなどの「目に見えない高速伝播型のリスクによる脅威、潜伏期間が長期に亘る放射能事故などによる環境汚染など、安全に対する基本的な考え方も大きく変化せざるを得ないのが現状だ[10]」と強調されている。

本プロジェクトは平成15年（2003年）度に実施されたものであり、当時は9・11（2001年）とそれに続くイラク戦争（2003年）により、世界中がこれまで経験したことのないテロの脅威を目の当たりに衝撃を受けた時期だった。それゆえ「安全」に対する意識がそれまで以上に高まった時期でもあった。後述するように、9・11が齎した圧倒的な暴力は、世界中を震撼させ、テロリズムという概念すらも改めて問い直されるきっかけとなった。筆者にとって本報告書が興味深いのは、(財) 国際交通安全学会という交通系の学会が、交通という枠組みを超え、思想史、法律、薬物・食品、経済学、そして交通という多岐にわたる視点から「安全」について考察し、今日の「安全」概念が持つ暗黙の前提をあぶり出している点である。それでは、具体的にどのような暗黙の前提があるのか見ていきたい。

### 2-3. 「安全」概念に潜在する今日的意味

まず報告書では、「安全」という言葉が、「極端には人の死傷が問題になる場面で使われている」ことに加え、「自己保存的動きをなしうる機能体であれば、その動きの阻害に対して安全を問題にしてきた[11]」（強調・筆者）と指摘されている。ここで注目したいのは、「自己保存的動き」という表現が用いられていることである。「自己保存」という言葉が端的に示しているように、「安全」という概念は、生物や有機体の他にも、社会の中である種の生命活動をしている諸機関や組織などにとっても必要不可欠なものであり、それらは常に危険から身を守るための「自己保存」の働きと密接な関わりを持っているのである。さらに興味深いのは、報告書全体の立場として、「安全」の意味と特徴を次のように述べていることである。

> 以上の特徴からして『安全』とは単に時を経るのではなく、事を通じて困難、災難、現実的にはささいな被害があっても、さして損害を受けず、被害に至らず、損失無しと言いうる状態で移行することを意味しよう。純粋に目的結果に関して、誤差、過誤等の過失の無いのを「成功」というのに対し、成功の過程において災禍に遭うことなく通過するのが「安全」の特徴である[12]。（強調・筆者）

---

を改めて問い直そうとした意図の背景には、「安全という概念を自明の理としてとらえ、表面的とも思える安全対策に目を奪われている現状への反省と、これからの時代に相応しい安全のあり方についての模索がこめられている」と述べている。（同上、p.1）

[9] なお本報告書は、第１章「序論」から第４章「結語と提言」、末尾の「資料編」から構成されているが、「序論」を含めたすべての章が、複数の執筆者によって書かれている。したがって「序論」は5つの節に分けられているが、2名の執筆者がいる。

[10] 小林實、同上、p.1。

[11] 財団法人国際交通安全学会、同上、p.3。

[12] 財団法人国際交通安全学会、同上、p.4。

筆者から見た時、このわずか数行のうちに、今日の「安全」概念に含まれる暗黙の前提が示されている。すなわち、上記に示された「安全」概念の定義と特徴づけには、まさにSDGsの理念に見られるような、〈平常化の重視〉と〈持続的な成長・成功〉の両立の重視が示唆されている。言い換えれば、さまざまなレベルでの「安全」概念に共通しているのは、絶対的な無害や無傷ではなく、成功への過程において「災禍」と言われない程度の最小限の被害に抑えることが目指されているということである。つまりこの報告書では、辞書的な意味[13]とは異なり、「現実的にはささいな被害」があったとしても、「損失無しと言いうる状態で移行すること」を「安全」と捉えることが明言されているのである。

したがって上記の内容が示しているのは、完全に無傷状態でなかったとしても、「災禍」の範疇に入らなければ「安全」と捉えて良いということ。そして「純粋に目的結果」に関して過失のないことを「成功」とすることを定めた上で、「成功の過程」で「災禍に遭うことなく通過する」ことを「安全」の特徴として捉えていることになる。

こうした解釈を補強するものとして、ブリタニカ・オンライン・ジャパンによる「安全」概念も参照しておきたい。そこでは「安全」について次のように解説されている。

> 安全とは元来、危険や災害などによってそこなわれるおそれがない安らかな状態をいうが、生活環境が複雑化し、予測しがたいさまざまな危険性の内在している今日、安全が積極的な行動の目標として重要な意味をもちつつある。すなわち、危険な事態の予測、想定、危険要因の分析、解明と排除もしくは他の条件による補完、そして危険が生じた場合に被害を最小限にする周辺条件や事後対策の整備などによって安全が指向される。裏を返せば、安全性とは潜在する危険が発現する可能性と対応する[14]。（強調・筆者）

上記の解説でも示されているように、時代の流れに伴い、私たちの生活環境は複雑化し、日常生活の中に「予測しがたいさまざまな危険性」が内在するようになった。このことは、安全概念が、単に現在進行形の「安らかな状態」を意味するのではなく、積極的に未来を先取りしながら「危険な事態の予測、想定、危険要因の分析」を行う必要があることを示している。それは、技術-情報社会におけるデータ分析と技術力向上によって、これまで可視化できなかったこと・予測できなかったことが、

---

[13] いくつかの辞書や辞典の意味を比較してみると、概ね記載内容は同じであるものの、若干ニュアンスの差があることに気が付く。例えば『精選版 日本国語大辞典』[2006]では、「安全」は、「1. 危険のないこと。平穏無事なこと。また、そのさま。（中略）2. 傷ついたり、こわれたり、盗まれたりする心配がないこと。また、そのさま。（中略）3. 心を落ち着かせること。気持ちを安らかにすること」とある（p.221）。このうち1．と2．は、複数の辞書・辞典に共通して記載されている。それに対して、『大辞泉』[2012]では「1. 危険がなく安心なこと。2. 傷病などの生命にかかわる心配、物の盗難・破損などの心配のないこと。また、そのさま」とある（p.149）。一見すると大差はないが、前者『精選版 日本国語大辞典』では、「安全」が状態や様態として捉えられているのに対し、『大辞泉』の場合、状況や状態（危険なこと、傷病、盗難・破損）に伴う心理的な側面（安心なこと、心配のないこと）にやや重点が置かれている。

[14] 「安全」Britannica ONLINE JAPAN（https://japan.eb.com/rg/article-00572400：2022.12.29閲覧・hosei vpn使用）

可視化され予測できるようになったからこそ、求められるようになったとも言えるし、それだけ危険因子も複雑化したとも言える。

しかも、「安全」概念のこうした変化は、今日の社会において「危険」のあり方が予測不可能なまでに多様化したことと不可分の関係にある。別言すれば、技術-情報社会の中で安全対策に関する技術力が向上したのと同様に、暴力のあり方もより巧妙で異質なものへと変化しているということである。まさにH・ヨナスが指摘していたように、時代の変化に伴い、私たちの行為の多くが質的に新しい種類の性質を持つようになったのであり、それに付随して、社会全体においても新しい次元の倫理学が要求されているのである[15]。

加えて、筆者としては、上記のような「安全」概念の変化は、たんなる「危険やリスク」の種類の増加という意味以上に、私たちの「生（life：生命・生活・人生）」のあり方に深刻な影響を与えていると考えている。ここからは少し遠回りになるが、その変化を「感性の喪失」と「知覚の補綴」として明らかにしていきたい。

## 3. 自己保存としての「感性の喪失」

### 3-1. 知覚の「道具化」

地球規模で進む技術-情報社会とそれに伴う社会の変容は、私たちの生活環境を大きく変え、日常生活から社会生活に至るまで、現象する世界の様相を大きく変えた。筆者の見解によれば、こうした現象世界の変化とそれに伴う人々の知覚情報の変化は、私たちが物事を把握する際の仕方や思考の仕方、さらにはそこから形成されていく価値観など幅広い思考活動をも変容させたと考えている。つまり筆者は、知覚情報の変容によって、人々の価値観や物事を判断する際の基準など、人々の思想の基盤にも影響が及んでいると考えている。

というのも、本稿の冒頭でも言及したヴェルシュが指摘していたように、「知覚」と「感性」には密接な関わりがあるからである。ヴェルシュは、「感性の思考」を論じる中で、「知覚」が単なる感覚を受容するだけの器官なのではなく、「指導し遂行するメディア[16]」としても決定的な意味をもっていることを指摘していた。後述するように、いわゆるメディアの発達によって私たちの知覚情報が劇的に変化したことはもちろんであるが、まずもってヴェルシュは、「知覚」そのものがメディア（媒体・媒介）として決定的な役割を果たしていることを指摘していた。そのさい重要なのが、彼が用いる「知覚」と「感性」という概念には、語源を含めた思想が含意されていることである。

ヴェルシュは「感性の思考」を展開するさい、「知覚（Wahr-nehmung）」と「感性（Ästhetik）」の二つの概念に着目しながら論じるが、彼自身が強調するように、そこで用いられる「知覚」とは、「『感覚による知覚（Sinneswahrnehmung）』よりも広い概念」として捉えられている。より具体的には、ヴェルシュが論じる「知覚」とは「単なる感覚的知覚にとどまらないさまざまな知覚」を意味しており、常に「想像的な契機」が含まれているという意味で、その作用も「感覚的な知覚に限定されない」ものである。それゆえ肝要なのは、「知覚」という概念を「文字通り『真として受け取ること（Wahr-

[15] Cf. Hans Jonas[1979].
[16] W. Welsch,[1990],S.51.（邦訳、p.53）

nehmung[17])』と理解すべきであり、洞察という性格を有している」ということである[18]。彼の主張を筆者なりに解釈すれば、「知覚」とは外界からの刺激を受容する感覚器官でありながら、同時に、個々の思考の基盤である「信（念）なるもの」を構成するための根本的な要素を把握する機能であると言えよう。

さらに、「感性（Ästhetik）」という語には注意が必要である。ヴェルシュは「感性」について論じるさい、単に感覚（sense）的な刺激を受容する機能としての Sensibilität / sensibility ではなく Ästhetik / aesthetic を使用する。それは、彼が「感性的なもの」を「思考そのものの核心にかかわるもの[19]」（強調・筆者）と捉えていたからに他ならない。ヴェルシュは、「感性についての学（美学）」を、「アイステーシス［感性を意味した古代ギリシア語］の学として、つまり感覚的な知覚であれ精神的なそれであれ、（中略）あらゆる種類の知覚を主題化する学として[20]」（強調・原文）理解しており、それを「感性」という語に含意させていたのである。

それではこれらを念頭に、ヴェルシュが示した両概念の関係性について検討しよう。ヴェルシュは、「現代という時代」が無感性化によって特徴付けられると指摘しながら、知覚と感性の関係について次のように述べていた。

> 無感性的な諸特性は、見わたしえぬほどに、社会的・現実的に浸透している。それは感性的なものそれ自体の領域において既に浸透しはじめており、しかも付随的にではなく、まったく組織的に浸透しはじめている。情報社会において知覚は、標準化され、あらかじめ成型され、無理強いされている。知覚の洪水が知覚の喪失と手をたずさえている[21]

このように述べながら、ヴェルシュは「無感性の諸特性」について、巷の旅行客に散見される二つの光景を事例に示していく。ここでは紙幅の都合上、その事例から浮かび上がる彼の主張を筆者なりの解釈でまとめておきたい。第一に、メディアを通じて配信される膨大な情報（＝知覚の洪水）は、人々に対して〈理想の型〉をメッセージとして提供しながら宣伝し、人々は無自覚のうちにそれらを自らの模倣対象と見做す。そして規格化された表象（re-presentation：再-現前）を模倣することで〈快〉を得ている。そのことは、人々が自分自身の主体的で直接的な知覚によって外界の美しさや意義を理解するのではなく（＝知覚の喪失）、メディアによって規格化された情景をリアルな現実として目撃した〈快〉と、それを自らの手で記録に残すミメーシスの産出行為によって得られる〈快〉に過ぎない。

第二に、主体性や直接性を失った「知覚」は、そのメディア表象による規格化のうちで、自らの行為を確認するだけの「道具」となってしまった。それは、人々が実際に体験して得た知覚情報を自らで思考したり判断するのではなく、メディアを通じて意味づけされたり、〈価値〉が創出されたりすることで、行為の正しさを「確認」するだけになってしまったことを意味する。本稿の内容に引き寄せて考えれば、無感性の蔓延によって、自らの感性を発揮することなく、規格化された安全性と一致し

---

17 「Wahr-nehmung」：Wahr〔= true,real〕+ nehmung (nehmen) 〔= take〕
18 W. Welsch,[1990],S.53.（邦訳、p.55）
19 W. Welsch,[1990],S.51.（邦訳、p.53）
20 W. Welsch,[1990], S11-12.（邦訳、p.2）。
21 W. Welsch,[1990],S.69.（邦訳、p.74）

ているかどうかを確認するだけの道具と化したとでも言えるだろう。

以上のことからヴェルシュは、個々人が習得する能力であるはずの知覚が、「社会的画一化の道具へと転じて」しまい、「感性的なものが無感性的に遂行される」と警告を発する。ちなみに、ヴェルシュの論述の中では、〈快〉という表現は用いられていないが、彼がカントの影響を受けていることや、知覚には「想像的な契機」が含まれていると考えていることを鑑みれば、『判断力批判』の思想的な背景を踏まえて理解することは、あながち行き過ぎた解釈ではないだろう。重要なのは、そうしたことに多くの人々が無自覚の状態にあるという点である。

### 3-2. 知覚情報の〈等価性〉と「自己保存」

筆者の見解によれば、ヴェルシュの指摘は、現代の SNS やアテンション・エコノミーに代表される現象においても容易に当て嵌めることができる。むしろ、自らが投稿した写真を通じて他者からの高評価を獲得し、その他者評価によって自らの価値を高めようとするような社会現象は、ますます他者からの評価に依存していることの表れと言って良い。このようなヴェルシュの指摘と同様に、知覚が「社会的画一化の道具へと転じ」たことを別の角度から分析していたのが J・ボードリヤール（Jean Baudrillard）である。

周知の通り、かつてボードリヤールは、急速に進む大量再生産とメディアの発達、そしてモノの大量消費が進む「豊かな社会」への変容を批判的に捉え、「消費社会」に見出される人々の無自覚な変容や、大量消費社会において商品が差異の表示記号としての意味を担うようになったことを見事に抉り出した。筆者から見たとき、その核心的な部分は、ヴェルシュの「感性の思考」と同質の問題を提起している。それが、情報の「等価性」に対する言及である。

ボードリヤールは、メディアを介したニュース番組とその合間に挟まれるコマーシャルに注目し、それらが戦略的な記号化を繰り返すことによって、多種多様な知覚情報が知らず知らずのうちに「等価性」へと還元されていくことを指摘していた。彼によれば、メイン番組の間に挟まれるコマーシャルは、一見すると無秩序な寄せ集めのように見えるが、「実際の手口はもっと巧妙」である。それらは計画的に交代させながらメッセージを組織的に連続させ、「記号のレベルでの等価性を押しつける[22]」（強調・原文）。それゆえボードリヤールの指摘によれば、真の消費効果とは、直接的な広告の言説の中にあるのではなく、一見バラバラのものとして流しながら、「放送という抽象的な次元において他の記号と並んで組み合わせられる記号」になっていくことなのである[23]。換言すれば、私たちが日々の情報を得るメディアでは、各地で発生した事件や事故の報道も、日々の生活で必要な日用品のコマーシャルも、一連の図式の中で記号として還元されていく。したがって私たちが実際に消費しているのは、実際の視覚的な情報として得た事件性やイメージそのものなのではなく、「想像しうるありとあらゆるスペクタクルが次々と出てくる可能性」と言えるのである。

そうであるならば、事態はより深刻である。なぜなら私たちの知覚は、ヴェルシュが指摘したような「社会的画一化の道具」となっているばかりでなく、知覚による「想像的な契機」までも、安易な連想ゲームのように消費の一部として利用されてしまっていると考えられるからである。それはまさ

---

[22] Jean Baudrillard[1970], p.187.（邦訳、p.174）
[23] Jean Baudrillard[1970], p.187.（邦訳、pp.174-175）

に、冒頭で触れた、外界の刺激に反応し受容する能力としてのいわゆる「感性（Sinnlichkeit）」が、直観するその瞬間からすでに管理され、ハイパー資本主義の支配下に置かれる事態を体現している。日常の社会生活を〈予測〉しながら過ごすよう習慣化された現代人は、知らず知らずのうちに可視化されたイメージから抽象化された、現実的には予測不可能な未来を「可能性」として消費し、それがある種の「不安」として体内化されているということである。それはあたかも非言語のスローガンが刷り込まれていくように、ゆっくりと人々のうちに入り込んでいく。

実は、こうした社会を予測するかのように、ヴェルシュは「こんにちの大衆社会においてわたしたちを取りまいている、感性的に耐えることのできない社会的・環境的・人間的な多くの現象において」、私たちは「目をそむけること、つまり痛切な知覚を拒否することが、ほとんど自己保存の前提条件と化している[24]」（強調・筆者）と述べていた。彼が指摘する「多くの現象」の中には、「政治家の多くの演説」や都会の無数の残留物、社会状況などが想定されていたが、現代社会で考えれば、SNS による陰湿で攻撃的な書き込みや、フェイクの情報、悪意の有無を問わず無根拠に発信される種々の情報が考えられる。筆者が遣る瀬無いのは、こうした「痛切な知覚を拒否すること」が必要な状況が発育過程の途上にある若年層にまで及んでいることである。ヴェルシュがいみじくも指摘したように、誹謗中傷をはじめとした心無い現象は、目をそむけたり知覚を拒否したりすることをしなければ、「自己保存」が難しい状況に陥る危険性さえ有しているのは、周知の通りである。

しかし、現代の技術･情報社会を生きる私たちにとって、目をそむけたり、知覚を拒否したりするだけで済むだろうか。あるいは、知覚を拒否することは、現実的に可能なのだろうか。

## 4. 暴力に抗する「無感性」と免疫機能

### 4-1.「知覚の補綴」と「信（念）なるもの」

かつて B・スティグレールは、技術と人間との関係について述べながら、技術の発展はそれまであたかも安定しているように見えていた物事の状態を宙吊りにしたり、安定しているように見えたにすぎない状況を疑問に付したりすると指摘していた。彼がこのように述べるのは、普段私たちは自分が見たり聴いたりするもの、つまりは自分が知覚する（percevoir – perceive: per(完全に)-ceive(つかむ)）ものを信じていると考えているからである。スティグレールによれば、私たちは、知覚から得た情報を頼りに考えたり判断したりしているが、技術の発展による世界の変容という事態は、そうした人々の知覚情報をも変化させた。それは、知覚世界が変容することによって、私たちが信じるものや、思考・判断の仕方にも変化が生じることを意味する。

重要なのは、私たちが見たり聞いたりしているものをそのまま信じている、その「信じるということ（croyance）」の盲目性である。換言すれば、スティグレールは、私たちの「信（croyance）」の大部分を支えているものは何かという問題をあらためて問いに付している。というのも、科学技術が発達する時代よりも以前に生きた人々は、自分が見たり聴いたりするものを素朴に信じていたが、技術の発展は、そうした知覚世界を大きく変えたからである。

たとえば視覚に限って言えば、高度な技術を用いたフェイク動画などを考慮する以前に、私たちは、人によって眼鏡をかけたり、コンタクトレンズを入れたりすることで外界の対象を観察してい

[24] W. Welsch,[1990],S.70.（邦訳、p.75）

る。普段はあえて反省的に考えることはしないが、眼鏡やコンタクトレンズは人工物であり、それらを必要とする人々は、技術の産物を媒介することで外界世界を把握することが可能になっている。今日のようなインターネットやSNSが発達した社会においては、不特定多数の声が、真も偽も入り乱れた状態でたった一つの画面の中に瞬時に映し出される。このような技術-情報社会において、私たちは、身体的にも精神的にも、常に人工的に作られた「知覚の補綴（prothèses de perception）[25]」を媒介にして外界を把握しているのであり、さまざまな場面で技術の影響を被っている。

この点についてスティグレールは、人工物が私たち生体の知覚作用を補綴することで、「われわれの信（念）が構成される諸条件が、激しい進化の段階に突入したことを意味する（強調・原文）[26]」と注意を喚起していた。別言すれば、私たちが日常生活の中で獲得している多くの知覚情報は、なんらかの人工物を媒介したものであるが、私たちはそうした「知覚の補綴」を媒介していることなど意識しないほど、日常生活に馴染んだものとして過ごしている。そのことは結果的に、私たちが物事を考えたり判断したりする際に必要な、いわば思考の基盤となる「信（念）なるもの」が、これまでとは全く異なる仕方で構成されていることを意味する。つまりそれが、技術が発展することによって引き起こされる結果であり、「私たちの知覚世界がそれと気づかないうちに大きく変わってしまうことの意味」であると筆者は考える。

ちなみに「補綴（prothèse）」とは、一般的に人体の欠損した部位や機能を人工物によって補い、失われた機能を回復させたり、代替させたりすることを意味する。しかしスティグレールは、「人工器官（義歯、義肢、義眼等）」を指す「補綴（prothèse）」の意味を拡張し、自身の術語として用いることで、生体と人工物との境界を曖昧にさせようとする。それは、彼の著作の翻訳者である浅井も述べるように、スティグレールが「補綴」の概念に「人間が生存のために必要とする人工物」（強調・筆者）であることを意味させようとしているからに他ならない[27]。しかもスティグレールは、この語を単なる人工物としての物理的な道具ばかりでなく、普段私たちが使用している言語等の抽象的構築物も含めて思考していくのである[28]。

以上のことからも、スティグレールが「補綴」という言葉を自身の概念として強調するのは、まさに、私たち人間が「補綴」に依存しながらしか生きられないということであり、そうした人間の性質を意味するためであると言ってよい。だからこそスティグレールが用いる補綴性とは、補綴物なしでは生きられない人間の性質、つまりは人間を人間たらしめるための条件が補綴物の利用にあることを指している。しかも「補綴」とは、何らかの欠如を補うものではあっても、実際に欠如部分を修復させるものではない[29]。だからこそ「補綴」は、同化されることなく常に要求されるものであり続けるのである。

そうであるならば、先に示したようなヴェルシュの見解、すなわち「自己保存」のために「感性的

---

[25] Bernard Stigler, *ibid.*, p.167.（訳書、p.239。）
[26] Bernard Stigler, *ibid.*, p.167.（訳書、p.239。）
[27] 浅井幸夫訳注［2009］、p.23。
[28] 私たち人間は、普段、当たり前のように言語を介してコミュニケーションを行なっているが、その言語も人間の文化的な産物であり、人間の社会生活にとっては必要不可欠な人工物（補綴）である。それゆえ、宗教やそれにまつわる制度、法や社会システムなど、さまざまな文化的な産物が「補綴」のうちに含まれることになる。
[29] もちろん最近では、CRISPR-Cas9の開発などにより、ゲノムレベルでの改変が可能になってきた。これらの技術革新は、生命倫理の問題とともに、別の哲学的思索が必要になるだろう。

に耐えることのできない」さまざまな現象から目をそむけたり、知覚を拒否したりする行為は、もはや現実的ではない。なぜなら私たちは、すでに生存のために、さまざまな補綴を自らのものとして利用し、それらを自らの一部として体内化した上で自己保存的な活動をしているからである。翻って考えれば、私たちはある意味で、「感性の喪失」という事態をも自己保存のために必要な「知覚の補綴」として適用させているのではないだろうか。

最後に、「安全」や「自己保存」の対極にある「暴力」からこの点を考察してみたい。

### 4-2. 「出来事」としての暴力

先に引用した（財）国際交通安全学会の報告書が、ちょうど9・11を経た後の時期であったことはすでに述べた。間も無く事件から四半世紀を迎えるこの事件も、一つの「歴史」として沈澱しつつある。しかし、今一度思い起こしておきたいのは、この事件が、単に凶悪なテロリズムによって多くの犠牲者を出した悲惨な事件だったということだけではない。肝要なのは、9・11がまさに時代の流れを見事に捉え、それを逆手に取った新しいタイプのテロリズムであったことである。だからこそこの事件は、「テロリズム」の観念を大きく変え、「安全」概念を大きく揺さぶったのである。

そして本稿との関係で言えば、9・11が露呈したものとは、技術-情報社会に生きる私たちの感性が、いかに脆弱で鈍感なものとなっていたかという現実である。別言すれば、9・11とは、事件そのものの衝撃性は去ることながら、もはやこれほどまでに圧倒的な暴力性とスペクタクル性がなければ、人々が真剣に“出来事”と向き合うこともなければ、心を揺さぶられることも無くなっていたというその現実を突きつけたと言ってよい。先にも述べたように、どれだけ多くの犠牲者を出すような事件を起こそうとも、メディアから報じられるニュースに慣れきってしまった私たちは、それまで流されていた陰惨な事件も災害の被害状況も無かったかのように、ひとたびチャンネルを変えるだけで他愛ない芸能ニュースや瑣末な情報番組に取って代わる現実で過ごしていた。時間に追われながら目の前の日常をやり過ごしながら暮らす人々にとって、日々のニュース番組はその都度消費される“情報”に過ぎず、チャンネルと共に「知覚」も「思考」も切り替わる現実があったのだ。そうした現実が日常化した社会に対し、9・11は、まさに映画さながらの光景を世界中に配信し、かつてないほど戦略的にメディアを利用した―それはアテンション・エコノミーの原理を見事に反映したような―狡猾なテロリズムであったのだ[30]。

ところでこの事件が発生する10年ほど前に、ボードリヤールは「『見世物的な』暴力と日常主義の安全とがともに抽象概念にすぎず、神話と記号に支えられているという点で同質のものである[31]」ことを指摘していた。そして現代の暴力が、この「平穏無事な生活の現実のもろさという亡霊を祓いのける」（強調・原文）ための「ワクチン」のようであるとも述べていた。筆者なりに解釈すれば、それは〈予測〉に基づく生活に従属した現代人が、日々の膨大な情報の中で、実際には予測不可能な「可能性」を消費し続け、現実の「もろさの亡霊」に取り憑かれてしまった状態とも言える。日常の暴力をワクチンのように敢えて摂取することで、「可能性」の過剰摂取によって引き起こされる不安

---

[30] そして周知の通り、9・11はその後に発令された米国愛国者法や、イラク戦争、そしてアブグレイブ収容所における虐待問題など、さまざまな問題含みな議論を呼び起こしたことは決して忘れてはならない。

[31] Jean Baudrillard[1970], p.278.（邦訳、p.266）

を解消するかのようである。しかし、必ずしもワクチンが効果的とは限らない。

周知のとおり、ワクチンとは外部の異物を積極的に摂取することにより、自己の体内に抗体を作り、異物に対する免疫を獲得する仕組みをいう。そして免疫反応とは、外部からくる抗原に対抗して抗体を生み出すことにより、自らの身体を異物から保護し守るための反応と言える。デリダの言葉を借りれば、それは外部から侵入してきた異物に汚染されぬよう、自己の身体が「無傷なもの-であること（l'*indemn-ité*）」を保護するための反応といえる。しかし興味深いことに、生命という有機体には、こうした自分自身の免疫的な防御を破壊し、自己防御に対抗して自らを保護しようとする自己-免疫（auto-immunité）作用がある[32]。つまり本来、自分自身を守るためであるはずのものを自ら攻撃してしまうのである。それは絶対的な生命の危険を回避するための、つまりは生命体にとって「損失無しと言いうる状態で移行する」ための「安全」対策なのかもしれないが、デリダが指摘するように、「生ける存在者が「みずから」、ほとんど自殺のごとき仕方で、自己自身の防護作用を破壊するように働く[33]」奇妙な作用なのである。

以上のように考えた時、これまで考察してきた「無感性（Anästhetik）」の状態は、ある種の自己-免疫作用の一種であり、生存のために必要な「知覚の補綴」と捉えることができるのではないだろうか。本稿の最後に、これに関する筆者の考えを述べておきたい。

## 5. おわりに

これまで述べてきた通り、技術-情報社会を生きる私たちは、もはや避けることが困難なほど溢れんばかりの情報の中にいる。日々のニュースを消費する多くの人々は、テレビや端末の画面を前に、銃弾も爆弾も降ってこない現実を生きている。砲弾が止むことのない現場から離れた別の地域で安穏と暮らしているからこそ、あっさりとチャンネルを変えることができるし、片手間で眺めていることができる。それは、繰り返し述べているように、感性（Ästhetik）が喪失し本来的な働きが鈍麻しているからに他ならない。

しかし見方を変えれば、それは人間の本来的な感性が完全に喪失してしまったわけではなく、現実的な問題として、そのようにしなければ、あまりに急速な社会の変容に人々の感性が対応できなかったのではないだろうか。人類が誕生し、文化・文明を築いた長い年月を振り返れば理解できるように、21世紀以降に訪れた地球規模の社会変容は、人類史上においては異常とも呼べる速度である。もちろん、現時点では警戒を要するほどの変化ではないかもしれないが、それでも私たちは小さな変化を侮ってはならない[34]。たしかに視覚的に映る現実社会は、これまでになくハイテク化が進んだい

---

[32] Jacques Derrida,[1996], p.67.（邦訳、p.113）

[33] Giovanna Borradori,[2004], Le « concept » du 11 septembre, *Philosophy in a Time of Terror：Dialogues with Jürgen Habermas and Jacques Derrida*, Galilée.（「自己免疫――現実的自殺と象徴的自殺」藤本勇一訳、ユルゲン・ハーバーマス、ジャック・デリダ、ジョヴァンナ・ボラッドリ『テロルの時代と哲学の使命』岩波書店、2004年、p.141。）

[34] A・A・バートレット（Albert A. Bartlett）は、「２乗の力（The power of powers of two）」を強調しながら、「人類最大の欠点は、指数関数を理解できていないことである」と警告を発していた。彼によれば、初めはどんなに小さな数字であっても、それがある地点から圧倒的な数字になるということ理解することは、極めて重要である。彼はそれを示すために、「王様と数学者」の事例を出しながら、チェスゲームを発明した数学者とそのゲームを気に入った王様の話をしている。Albert A. Bartlett[1976], The Exponential Function, *The Physics Teacher*, AAPT,volume14, Issue7, p. 398.

わゆる「豊かな社会」である。けれどもその一方で、「商品」の非-物質化が進んだ今日の社会は、「情報」という非-物質的で不可算な存在に包み込まれ、制御不可能な状況にある。それゆえ、自己保存を究極的な目的に据える生物としての私たちは、〈平常化の重視〉と〈持続的な成長・成功〉を約束する「安全」に関わらないことは、感性を働かせる余裕がない。巷に溢れる多くの情報は、もはや誰にも止めることのできず、「等価性」へと還元することなしに、人々の平常を保つことは困難なのである。

以上のことから筆者の見解によれば、今日のハイパー資本主義に基づく技術-情報社会における「無感性」の状態とは、自らを守るための「自己保存」として機能していると考えることができる。質的にも量的にもさまざまな情報が乱出し、個々の真偽を精査する術も時間もない今日、知覚する情報の全てを事細かに受け止めていては、それこそ神経が滅入ってしまう。それでは、私たちはこのまま感性を手放すべきなのかと言えば、もちろんそうではない。このままでは、いずれ無感性の状態が平常化し、それが免疫疾患を引き起こす可能性もある。現時点で妙案を見出すことはできないが、それでも筆者は、〈将来〉よりも先にある〈未来〉を志向することが、これまでの文化・文明を築き上げた哲学の使命であると考えている。

未来哲学研究所が発行する学会誌『未来哲学』の背表紙には、毎回、筆者の好きな一言が書かれている。「希望がないのなら、〈捏造〉してでも生む出すために！」。私たちは、どんなに「感性（Ästhetik）」が麻痺し、「知覚の補綴」に頼らざるを得ない状況になろうとも、そのことから目を逸らしてはならないし、希望を〈捏造〉する努力を怠ってはならない。

## 6. 参考文献


浅井幸夫［2009］『偶有からの哲学――技術と記憶と意識の話』ベルナール・スティグレール、新評論。

朝日新聞［2021］「『絶望死』増えゆく米国」9月22日朝刊13面

Asti Hanifahm Efri Widianti, Kurniawan Yudianto [2018], Learning Concentration Level of Students at Faculty of Nursing Universitas Padjadjaran, *Journal of Nursing Care,*Vol.1 Issue 3.

Bartlett, Albert A. [1976], The Exponential Function, *The Physics Teacher* ,AAPT,volume14, Issue7.

Baudrillard, Jean [1970]『消費社会の神話と構造』（普及版）[1995/2002]、今村仁司・塚原史訳、紀ノ国屋書店。

Britannica ONLINE JAPAN（https://japan.eb.com/rg/article-00572400・hosei vpn 接続を使用）

『大辞泉』第二版［2012］。

Davenport, Thomas H., Beck, John C.［2002］ *Attention Economy: Understanding the New Currency of Business*.

Derrida, Jacques［1996］ « Foi et Savoir » aux limites de la simple raison, in *La Religion,* Paris: Seuil.『信と知―たんなる理性の限界における「宗教」の二源泉』［2016］湯浅博雄、大西雅一郎訳、未来社。）

Fisher, Mark [2009], *Capitalist Realism: Is There No Alternative ?,* Zero books.（『資本主義リアリズム』セバスチャン・ブロイ、河南瑠莉訳、堀之内出版、2018。）

Graeber, David［2011］, *Debt: The First 5,000 years*, Melville House Publishing.

伊藤高史［2008］「国家の外交政策に対するメディアの影響力と『CNN 効果』」『SOCIOLOGICA』32、創価大学社会学会。

Jonas, Hans［1979］, *Das Prinzip Verantwortung*, Suhrkamp Verlang.（『責任という原理』［2000］加藤尚武監訳、東信堂。）

小林實他［2004］、平成15年度研究調査報告書「『安全』を考察する」（プロジェクト No.H504）、財団法人国際交通安全学会、2004年7月（https://www.iatss.or.jp/common/pdf/research/h504.pdf）

Online Etymology Dictionary“schedule”（https://www.etymonline.com/search?q=schedule：閲覧日2022.12.29）

Oxford English Dictionary “schedule”,( oed.com）

『精選版日本国語大辞典』第一巻（初版）［2006］、小学館。

Stigler, Bernard［1996］, 'L'image discrète', *Échographies de la télévision*, Galilée.（「離散的イマージュ」『テレビのエコーグラフィー』［2005］NTT 出版。）
田島樹里奈［2019］「技術-情報社会における感性の喪失」、『哲学の変換と知の越境』所収、法政大学出版局、pp.116-132。
Welsch, Wolfgang [1990] *Ästhetisches Denken*, Reclam.（W・ヴェルシュ[1998]『感性の思考』、小林信之訳、勁草書房。）